

〃 二十二年四月舞鶴帰国

職 業 專業農家

シベリア抑留記

福島県 鈴木正之

出生から入隊

大正十五年十一月二十二日、現郡山市守山町大字正直字北二十三番地、柳沼家に生まれ、三代田尋常高等小学校高等科を卒業し、家業の農業に従事していた。昭和十八年に徴用され、奉天五八一部隊被服廠に軍属として勤続していたが、昭和二十年五月現地召集を受け、黒河省孫呉の歩兵部隊（部隊名不詳）に入隊した。

ソ連軍侵攻前

初年兵教育を受けていた。

ソ連軍侵攻

ソ連の宣戦布告とともに、陣地に入り訓練を受けたが、敵影を見ないうちに終戦を知らされた。

終戦

ソ連軍が進駐してきたときは、陣地を撤退し孫呉の市街の近傍にいたが、終戦間際に命令によって兵舎が焼き払われていたため、わが隊は演習場の馬小屋、天幕などに分散していた。八月十八ごろ武装解除され、武装ソ連兵に監視されながら、中隊全員で一週間ほど、一日四往復くらい、旧陣地より後方三キロ、四キロ地点に食料、被服などを背負い、搬出させられた。

シベリア抑留地への移動

九月中旬、内地帰還の希望を抱いて孫呉より黒河に行軍、九月十五日ごろ、外輪船によってブラゴエシチエンスクに渡り、部隊編成を崩され、途中ソ連兵の略奪をうけ、銃剣を突きつけられ、ライチハへ行軍した。

抑留地の生活

ライチハの収容所は以前からあったものだったが、到着してから増築工事を開始、半地下にするために二メートルくらいの穴掘り、丸太材を使って収容棟建築に使われた。この間の食料はコウリヤン、粟などで、その他に黒パン少量で、不慣れな丸太材工事の重労働

と将来に向かつての不安なども重なり、極度の疲労、栄養失調などが加わり、初めての厳寒に予想外の死亡者を出すことになった。特に初年兵にとっては、重労働という外圧に加えて、日本軍内部の人間関係も加重されて過酷な毎日であった。

労 役

宿舎完成後は、近くの露天掘りの炭坑に働かされた。正味八時間、多少の風邪、下痢、痔疾、神経痛、怪我などにも関係なく、零下四〇度にも採炭作業に駆り出されてノルマ達成のため職場監督の怒号に追い回され、ノルマ未達成のため、食事の量も減らされた。

抑留者の統制管理

極東ソ連の拠点ハバロフスクに近い収容所ではあったが、アクチブ活動もまだ活発化していなかった。日本新聞による広報活動等が徐々に強まっていた。

抑留中の生活と極限状態の意識

初めての越冬によって多数の死亡者を出したが、二年目の冬は炭坑の作業が三交代制になり、深夜作業もあり消耗はさらに酷くなり、帰還の望みもなくて、抑

留が長期化するに従いモラルの低下、盗み、怠業の機運が深まった。

帰 還

昭和二十二年二月にライチハで就業中、風邪に肺炎を併発し、ハバロフスク地区の病院に転送され、約三カ月で全快した。内地帰還のため五月にナホトカに移動したが、同地区の煉瓦工場の労役を課せられ、三カ月して内地送還となる。九月二十八日に舞鶴上陸、復員手続をとる。

「ダモイ」を心の支えに

茨城県 府馬 正 治

私は、昭和二十年三月、旧満州国黒河省孫吳というところの松岡第一二三師団孫吳工兵隊第三中隊第二班におりましたが、そのうち各班より勝る者をよりすぐり、一大隊にまとめて、その日のうちに神武屯の山奥に陣地構築に出発して行きました。五月には、自分た